

「かた」による造像

松 本 榮 一

法隆寺金堂内陣の小壁二十面に描かれてゐる飛天の像は、二十組が總て同じ姿で反復されて居り、配色の點に幾らかの變化が與へられて居ると言へ、各圖は同一の粉本或は同一の型紙・型板の類を使用して、線がきが成されたと思像せしめる節が強い。又、同じやうな事が金堂側壁の諸菩薩と五重塔内に於けるそれとの間にも見られ、更に金堂諸菩薩像の相互間に於ても、第二號壁及び第五號壁の兩半跏坐像や、第三・第四・第七號各壁面に見る立像菩薩などには、その製作の際の「かた」の使用が考へられるのである。

漢代の畫輒類には、人物・動植物・裝飾文様などをかたで押捺羅列したものが屢々見受けられる。かたは此の様に手間を省く場合に、古くから使用せられてゐるが、時には手間を各むのではなく、同じ形姿のものを必要とする事から、特にそれを應用する場合も少なくなかつた。今、それ等の事柄に就き、古代遺品に富む西域方面に實例を求めつゝ、主として佛教美術關係の彫刻繪畫に關し、實情を探つて見たいと思ふ。

「かた」による造像

型模紙板の類が最も有效に使はれてゐるのは、何と言つても先づ洞窟寺院などに於ける千佛像作製の場合であらう。これには浮彫りもあり、繪畫もあり、繪畫の場合は其の製作過程の闡明に困難を感じることもあるが、浮彫りの方は大體型模^{かた}で打ち出して壁面に貼附すると云ふのが、一般の行き方であつたやうである。その貼附の實例を燉煌千佛洞の壁面にとつて見よう。第一三五窟^(ベリオ氏編號)の周壁に、北魏時代の製作と思惟せられるもので、挿圖第一に示すやうな千佛像が夥しく遺存してゐる。中には脱落して、痕跡を残すのみの個所もあるが、周壁を通じ、四種類の小佛像が一定の配列順序で整然と五段に貼附せられて居る。そして、それ等の總ては型で造り出されたもので、スタイン氏の燉煌將來品の中には、この種の貼附千體佛像の數點が見出だされる。挿圖第二に示す二個は豎二十三^{註一}糧ばかりのもので、更に小さく十八糧ばかりのものも數個ある。曾て矢代幸雄氏が、本誌^(第一三號)で紹介された宇佐美氏所藏の塑造半肉佛像^(註二)も、亦恐らくは燉煌千佛洞の壁面から剥ぎ取られたものと思はし

く、その中の一個(同號、圖版第十)は豎三〇糎を超える美術であつて、千體佛の一と言はんより寧ろ單獨像と言ひ度い程の佳品であるが、これも型による大量生産品の一種である事は免れまい。この佳作に次い



挿圖第一 燉煌千佛洞第135窟 塑造千體佛
(Mission Peliot, PL. CCLXXXIII)

で矢代氏が舉げて居られる二個(同號、圖版第十一の一、二)は、豎十八糎程のもので、同一の型から押し出されたもの、如く、輪郭や肉付けに共通點が認められる。但し著彩は全く異つて居り、同じ型模から打ち出さ

れたものでも、著彩によつて容易に變化を與へ得るものである事が語られて居る。この事は大量生産による千體佛造像の際、甚だ重要な事になるもので、特に注目を要する。



挿圖第二 燉煌千佛洞 塑造千佛二種
(Stein: Innermost Asia, PL. XLIX)

あつて、同一の型模から打ち出された高肉の人物頭部として、その大いさの矮小なるに似ず(豎、約十三糎)、細工の緻密なのに感心するのである。相貌や鬚髯の様子から見て、婆羅門像に用ひた頭部かと察せられる。この婆羅門の頭部は、同一の型模から打ち出される塑像が、細部に至るまでよく相似性を保つものであると云ふ極めて平凡な事實を示せるに過ぎぬものであるが、然し、型模法なるものは、此のやう

前記矢代氏紹介の塑造佛像中の一つは、大いさから言つても作から言つても、千體佛の像としては讃嘆に値するものであるが、概して燉煌千佛洞註三に遺存する型モノには、粗末なものが多い。それに比較して、西域方面で最も精巧な型モノを多數に我々に見せて呉れるのは、喀刺沙爾カラシタル (Kara-shahr) 地方の佛教遺跡である。挿圖第三はスタイン氏がシールチェクShorchuk (Kor-xuq) 北方の一廢址註四から發掘した多數の塑造彫刻斷片中の二個で

に相似品を大量に造り出す事の爲めのみの便法たるに止まらず、その附帶物の適當な變化によつては、見違へる様な多^{ヴァリエーティ}様性を形姿の上に齎^{もたら}すことも亦可能である點を見逃してはならぬ。挿圖第四は、婆羅門の頭部が発見された遺址と同じ場所から出た四個の塑造頭部で、顔面の大きさも婆羅門と略ぼ同じ位のものである。一見、降魔の場面に登場する魔軍の軍卒とでも言ひ度いやうな惡相を具へ、四



挿圖第三 ショールチュク出 塑造婆羅門頭部
(Stein: Serindia, PL. CXXXII)

個それぞれの特色が形態の上に發揮せられてゐるが、よく見ると、その顔面の部分が、四個共に同一の型で作られてゐる事が判り、頭髮・頭飾の相違や鬚髯の有無などが、如何に面貌の様子を左右するものであるかを教へてゐる。爰に型模使用の妙味が先づ窺はれる。

この様な實例は東トルキスタン各地の彫塑類に於て屢々見られる所であるが、さてその型モノを造る型が一體どんなものであつたかを、一應知つて置く必要があらう。型の實物遺品も決して尠^{すく}くないが、喀刺沙爾^{カラシャール}方面から発見されたもの、中から實例を選び出すとすれば、挿圖第五及び第六の如きものを擧げる事が出来る。挿圖第七

「かた」による造像



挿圖第四 ショールチュク出 塑造頭部
(Stein: Serindia, PL. CXXXII)

は庫車^{クチャ}地方から出たもの、一例である。

挿圖第五は獨逸探險隊將來品中の一つで、菩薩形頭部と見られる塑造の型である。発見地はショールチュクである。挿圖第七の坐佛の型は、我が大谷探險隊の將來に係るもので、発見地は庫車地方のキジル千佛洞と言はれてゐる。挿圖第六はスタイン氏の將來に係るもので、前二者に比べると、型としては決して精巧なものとは言へないが、われわれの興味は寧ろこの一つに惹かれる。発見地は前掲各種頭部(挿圖第三、第四)と同じシ

『シヨールチュク』北方遺址、^{註六}塑造斷片で、現存部の長さ約三二一釐、幅一五釐、厚さ三釐。上段に見える坐佛は恐らく光背化佛を打ち出す爲めの型（^{九釐}約）らしく、顔面の細部などは作らず、眼や鼻は總て仕上げの際の篋又は筆に俟つといふ程度である。この坐佛の下に見える一對の蔵手の型（^{五釐}）は、挿圖第四の左端に見る人物の頸髭の如きものを作り出す際に使用せられる場合もあるであらうし、又時には額を被ふ頭髮の波にも使用せられた事であらう。下段の一對も亦大體同じ用途のものと思はれる。

かくの如く、細部を作製する爲めの型が、細ま細まと用意せられてゐると云ふ事は、言ふ迄もなくそれによつて比較的たやすく變化のあるものをも作らうとする企圖に相違ないが、型モノの形姿上の變化は、又別の仕様によつても達成せられてゐる事を知らねばならぬ。

こゝで挿圖第八の二軀の塑像を見ることにしよう。これもシヨールチュクからのもので、獨逸探検隊の將來品である（共に大いさ）。上半身の傾きが夫々逆になつて居り、^{阿克セツサリ}附帶物にも幾分の相違が與へられてゐる爲めに、一寸見ると氣附かれぬが、この兩像も亦同一の型から生れ出てゐるものである。先づ頭部を見るに、顔面は全く同じ



挿圖第五 シヨールチュク出 塑造菩薩頭部型
(Le Coq: Bilderatlas, fig. 180)

相貌を有し、頭髮の様子にも差が無く、兩者型を同じうするものである事明瞭である。次に胸部であるが、後で附加する綬帶の有無は別として、胸・肩・上膊などの相似は、型に據るにあらざれば到底得られぬ造りである。合掌は勿論後の工作である。それから下半身は如何であらう。裳の著彩が、一方は赤で他は空色に塗られて居るが、兩脚の形も襪の刻みも全く同一であり、殊に襪の部分々に、

原型の癖が其のまゝ、共通に現れてゐる點が面白い。これ亦型の使用を雄辯に物語るものである。

かくて此の二軀の立像は、頭部と胸部と脚部と、大體三つの部分が先づ型によつて造られ、それに兩手及び綬帶・環釧・瓔珞等の附帶物が追加され、更に色彩が加はつて完成されてゐる事が判るのであるが、注目すべきは其の軀幹三部分の繋ぎ様で

あり、僅かに上半傾斜の相違によつて、觀る者に型モノである事を氣附かしめぬ結果となつてゐる。これで若し全然別の形をした兩手を接いだとしたら、更に様相が一變したことであらう。

このやうに型モノ彫刻も、その型の巧みな驅使によつては、案外立派な成果が獲られる事が判るのであつて、西域諸地方に於ける石窟や祠堂の壁面裝飾が、この種の浮彫りによつて一應の成功を見せ

てゐる點に注目したいと思ふ。その壁面の實狀を語る一例として、
 爰にミン・ウイの一遺址^{註八}を挙げよう(挿圖第九)。この遺址には周廊
 の北部に多數の彫塑が遺存して居り、圖はその北西隅の狀態を示
 す。夥しい塑像が壁を背にして、所狹き迄に押し並んでゐる様は洵
 に壯觀である。そして、その像の中には、丸彫りに近い塑像(木又は
 を芯にして泥土を^{註九}著せて作つた像)も存在してゐるが、型の使用はその様な像にも及ん
 で居り、半肉の場合は、こゝぞと許り型の使用が反復せられてゐる
 事、圖が示す通りで、洵に東トルキスタンの佛教彫刻は「型模藝術」^{註九}
 (Formkunst)と呼ばれるに相應しいものである事が沁々と感ぜられ
 る。

彫刻は以上の如くであるが、然らば西域地方の佛教繪畫特に壁畫
 の場合は如何であらうか。

スタイン氏は、和闐^{コルダン}地方のカーダリク (Kandalik) 及びダンダー



挿圖第六 ショールチュク田 塑造型
 (Serindia, PL. CXXXVII)

「かた」による造像

ン・ウイリク (Dandan-oilik) に於ける祠堂遺址の千佛壁畫を、ス
 テンシル使用の大量生産的のものと斷じてゐる。^{註一〇}又、氏は燉煌千佛
 洞の壁畫や幀幡畫、或は萬佛峽石窟壁畫などに於けるステンシルの
 使用をも指摘してゐる。^{註一一}本誌卷頭の原色圖版は、東洋文化研究所收
 藏の壁畫斷片であつて、傳來は不詳であるが、スタイン氏が *stenc-
 iled buddha figures* と稱する其のカーダリクの千佛壁畫や、ダン
 ダン・ウイリクの千佛壁畫に近似したもので、和闐地方からの將
 來品である事は、確實である。然かも和闐地方の千佛壁畫として
 も、作の優秀なものである事が嬉しい。

カーダリク及びダンダン・ウイリクなどの例から推すと、和闐
 地方の千佛壁畫には、大體共通した方式があつたもの、如く、壁面
 を千佛で飾る場合には、先づ壁面に縦横の格子を劃し、その格間に
 一體宛の坐佛を容れるのであるが、色分けによつて六種の坐佛が其



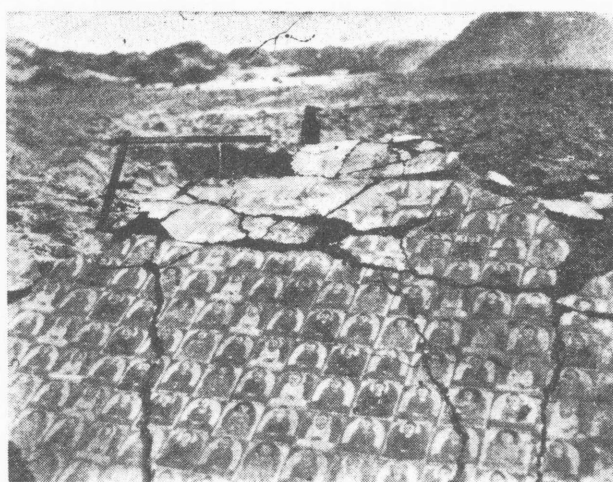
挿圖第七 キジル田 塑造坐像型
 (西域考古圖譜上、雜品圖版9)



挿圖第九 ミンワイ（シヨールチュク）塑像群
(Serindia, fig. 295)



挿圖第八 シヨールチュク出 塑造菩薩像
(Le Coq: Spätantike, I, Taf. 36)



挿圖第一〇 カードリク千佛壁畫
(Serindia, fig. 41)

處に數へられる(挿圖第十)。即ち、坐佛の形姿そのものに相違が無い場合でも、格間の地色、坐佛の著衣の色、頭光の色、身光の色などを夫々違へる事によつて、六種の畫像が作られ、一定の順序でそれが横に並び且つ反復され、而かも各段の配列に一區宛のズレがある爲め、像の配列は寧ろ斜線的に感ぜられる。かゝる遣り方は、廣

する事は、印度・西域全般を通じての慣例であつたものゝ、(挿圖第一の千佛洞半肉千體佛も亦その例に漏れぬ)。今爰に見る原色圖版の場合は、赤衣と緑衣の坐佛二體が残存してゐるに過ぎぬけれども、その周邊の様子から推して、格間の地色が緑・赤・青の順で左から右へ並び、且つ上段の配列との間に一ト間のズレがある爲め、例の如く斜めの縞を作り成してゐたものである事が判明する。恐ら

い壁面を千篇一律の千體佛で覆ふに際しては、裝飾的効果を發揮する上から、極めて當を得たものと言ふべきであらう(千體佛を斯く斜線的に配列

く、これも當初は六種の色分けによる六種の坐佛から成る千體佛であつたであらう。

所で、スタイン氏が言ふステンシル使用の形跡を、この壁畫の上に尋ねる事は、これが僅か二體の坐佛を残すに過ぎぬ斷片である點、然かもそれが著衣の色を異にする別口の坐佛である點、又、剝落が綠衣像に於てのみ甚だしく、赤衣像には殆ど無い爲め、下描き^{したが}の様子を較べ合はす事が不可能である點、などから甚だしく困難を感ずる。然し、この僅かながらの殘存部に於ても、大壁面に千體佛を配置するに當つての手順を物語る痕跡が拾ひ出されぬ譯でもない。

先づ兩尊の顔面中央部を豎に走る幽かな朱色の直線に注目したい。この線は髮際に始まり右眼の内眥を掠めつ、鼻梁^(二本の平行線)に平行して垂直に降たり、頤を経て衿元邊りで止まつて居る。言ふ迄もなく此の朱線は、大壁面に千體佛を割り付ける際の「見當」の役目をなすものに相違ないが、嘗に坐佛の位置を指定すると云ふ大雜把なものでなく、もつと細かい所までを定める準備行爲である事が、綠衣像の方から判明する。即ち、綠衣像の顔面から衿元に残る其の朱線を更にその方向に延長して行くと、一旦胸部で途切れた線が、再び手の部分で現れ、扁平五角形^{註一四}をなす其の定印を結ぶ手のほど中央邊を豎によぎり、手の部分のみでその直線は短く終つてゐる。つまり、この一連の朱線は、大體坐佛の中軸を示すと同時に、顔と手と云ふ二個所の露出肉部の位置をも、はつきりと定めてゐるのであつ

「かた」による造像

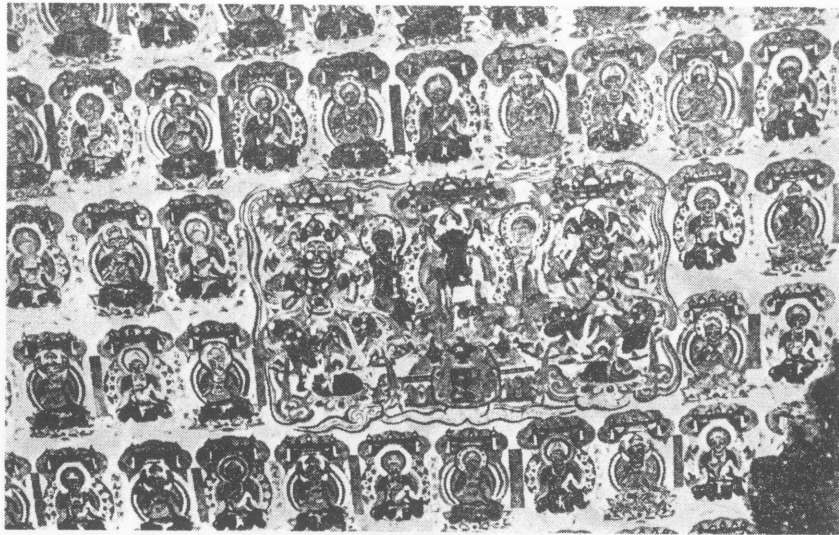
て、此の二つの「見當」の指示に従つて、ステンシルが置かれ、次いで概略の形像が印せられて行くと云ふ順序の如くである。

この場合のかたが、型紙であつたか、それとも金屬薄板による型板であつたか、その詳細は不明とするも、極く簡単な切抜きの板型であつた事は、綠衣像の剝落部が教へて呉れる。

綠衣像の綠衣の著彩は著しく剝落してゐるが、この綠衣の下地には、全面に薄鼠色の顔料が刷かれてゐる^(白色の素地の剝落と共に、それが薄鼠色は點々として隨所に遺存し、特に手の周囲は濃厚であり、恰も定印を結ぶ兩手の輪郭を扁平五角形に太く筆書きしたかの如き觀を呈してゐる)。この薄鼠色が綠衣を色彩的に補助する役目でない事は明瞭であり^{面を覆ひ隠す}、要するに此の色が板型によつて置かれた部分であつて、これによつて坐佛の概略の形が示されるのである。而かも、この薄鼠色顔料の塗布は、衿元や手などの肉體の部分を避けて居るのであるから、この影の上を綠色で覆へば、通肩した綠衣の佛形の肩も胸も膝も一舉にして出來上り、あとは黒線を以てする襷の描き入れによる仕上げを俟つばかりである。

肉體の部分、即ち顔面と兩手は、肉色の描線で仕上げられる^(頭髪、眼及び瞳は黒色で描かれる)。その肉體の部分にもかたの使用があつたものかどうか、頗る判斷に苦しむのであるが、手の部分に残存する淡い樺色の下描きらしく見える線が、頗る直線的である點は、其處に何等かの機械的工作の行はれた事を匂はせるものである。因みに、手に於けるその樺色の輪郭線と、前に述べた薄鼠色で圍まれた扁平五角形とは、ピタリと合致すべき筈のものであるにも拘はらず、其處に幾分

のズレがある事は、型モノ藝術らしい粗笨さと言ふべきであらう。尤もこれは剝落部分の事、換言すれば樂屋裏の事柄であり、假令そこに機械的の齟齬があつたとしても、壁畫としての出來上りの點か

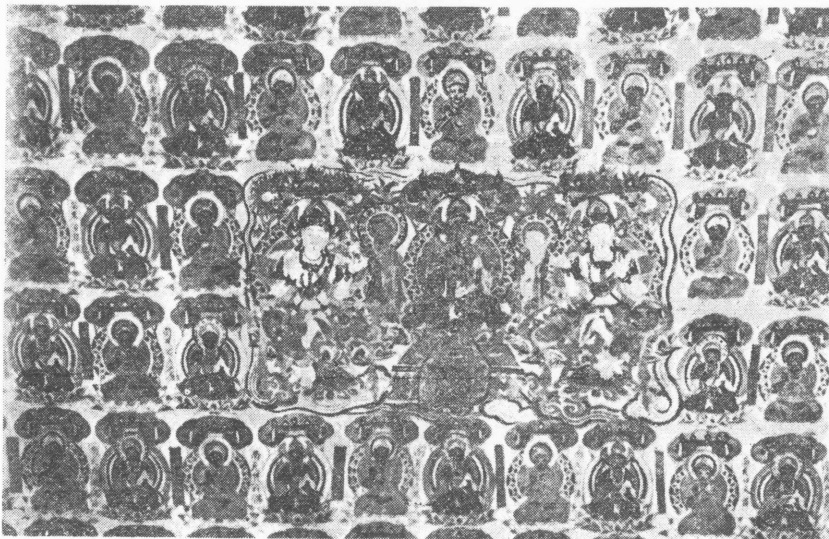


挿圖第一一 燉煌千佛洞第117窟天井壁畫 千體佛（前方）
(Mission Pelliot, PL. CCXXVIII)

ら言へば流石に和闐畫らしい fineness の横溢したもので、眉目を引く線や赤衣の衣文を仕上げる描線などに見る手に入つた旨味^{うまみ}、頭光身光の一つ一つに施した縹緗彩色の變化など、これが大量生産的に廣い壁面に羅列せられる千佛の取扱ひなのかと、聊か不思議に感

ぜられる程である。

以上、實例を和闐の壁畫斷片に取り、千佛壁畫作製に於けるかた



挿圖第一二 同 上（左側）
(Mission Pelliot, PL. CCXXVI)

の使用に關し、やゝ詳しい觀察を試みたが、勿論西域地方の千佛壁畫の總てが、此のやうな單純な遣り方で大量生産されたものとは言へない。遺品の中には更に複雑な手法、例へば、同じ型板を用ひるにしても、幾枚かを順に使用する掛合せ法の如き手の込んだ遣り方

を想像させるものもあり、又、型紙や型板で安直に擦り込むのではなく、カタはカタでも、所謂「ねんがみ」^{註一五}法とか pounce 法とか云ふ様な手法に據つたのではないかと思はれる製作もある。その手の實例が豊富に見られるのは、何と言つても燉煌千佛洞であり、特に唐宋時代の壁畫には注目し値するものがある。

一例として燉煌千佛洞の第一一七窟^{註一六}（ベリオ氏編號）の壁畫を挙げよう。此の洞窟は奥壁一杯に大きく五臺山の景を描いてゐるので、特に注目せられてゐるのであるが、天井の裝飾も華麗を極め、その四方折上面には一面に千體佛を描き、その一々に佛名が記入せられてゐる。挿圖第一一、第一二は、前方及び左手の折上面の中央部を示す。その千佛像の描寫には總て、かたが用ひられてゐる事は明瞭であり、然かもそのかたは相當に精巧なものであるらしく、使用法も亦進歩したものではなかつたかと想像される。勿論仕上げも入念で、藝術的價値の點からすれば問題もあるが、千佛壁畫としては珍しく手の込んだ遺品と言へるであらう。斯く、この洞窟に於ける千佛壁畫が、カタモノとしての精巧な作例である事は一應記憶せらるべきものであるが、更に此の天井壁畫に於ては、その三方^{左・右・前の三}（方）^{（後方は狀態不明）}の折上面中央に描かれてゐる三組の雲上三尊圖に留意せねばならぬ。

その三尊圖は、挿圖第一一、第一二に見る如く、佛菩薩の三尊に二比丘の加はつた、極めて常套的な圖樣から成るものであるが、三方に遺存する三組のものが、全く同じかたで作られたものである點

「かた」による造像

に興味が惹かれるのである。即ち、飛雲とか莊嚴具とか或は帶紐類とかの末梢的部分の異同は別として、主要部分、つまり諸尊の形姿の部分は三組を通じて全然同じであり、こゝにもかたの使用が見出だされるのである。そして、かたの使用によつて作られた線描きの諸尊への賦彩は、各圖夫々に相違して居り、單調を破る事に意が用ひられてゐる點も見逃し難い。

この程度の圖になると、それに使用せられるかたも、前記和闐千佛壁畫の場合の様な、切り抜き簡単な型板であつたとは考へられず、かたと言はんより寧ろ特殊の粉本であり、それによつて壁面に下繪を印したものと想像する外はない。そして、その粉本の線描を壁面に移すに當り、如何なる方法が此の場合選ばれたのか、それを突き止める事は困難であるが、法隆寺壁畫の場合と同様に、形附粉を用ひる「ねんがみ」法とか尖筆による線刻法とかいふ様な便法の應用が爰でも想像せられるのである。

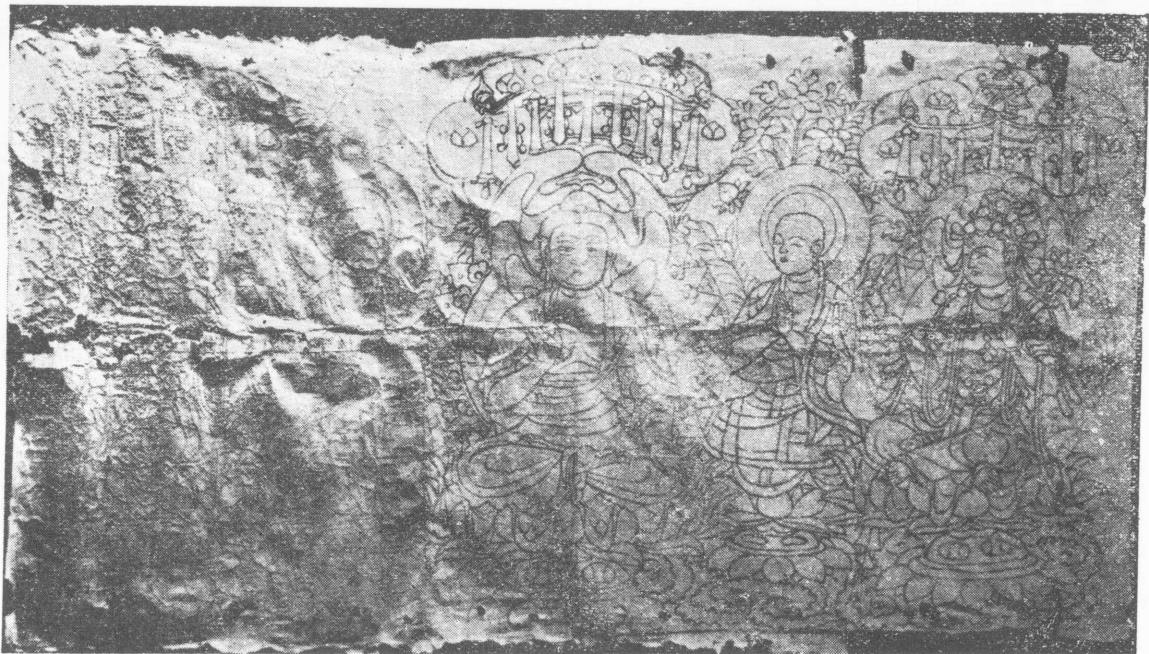
こゝで一寸触れて置かねばならぬものがある。それはスタイン氏將來の燉煌遺品中に特殊な強靱な紙に穿孔で描き出した佛畫數點が存在してゐる事實である。その最も大きな一圖^{（竪七六・二種）}（横一三七種）を挿圖第一三に示す。釋迦三尊に二比丘を加へた圖樣が、偶然にも挿圖第一一・第一二の燉煌壁畫に見える三尊圖樣に酷似してゐるが、この様な穿孔で出来上つたものが、壁面又は絹素への下繪轉寫の際の原型の役目をなしたのではなからうかと、一應考へて見るのである。ス

^{註一七}
タイン氏は此の手の遺品を pounce として取扱つてゐる。

九

スタイン蒐集集の中に見る此の

種の圖が、何れも普通の用紙でなく、特に強い紙を用ひてゐると云ふ事は、何となく型紙らしい感じを抱かせ、佛畫大量生産用の原紙であるかの様に思はせるのも尤ものであらう。所で、挿圖第一三の場合、穿孔は全面に亘つてゐるが、中尊を含む圖の右半は墨で輪郭が取られ、その線に沿つて孔が明けられてゐるのに對し、左側の半分は穿孔のみによる圖であり、然かもそれは右半の墨がきの部分を折り重ねて穿孔したものである事が判る。そして、これと全く同じ遣り方から成るものが他にも遺存して居り、それも亦同じく佛菩薩三尊に二比丘を加へた圖様で、大いさは挿圖第一三の圖に比べると遙かに小(横、二二種)である。この様に大小の相違はあれ、これ等が特殊の目的によつて作られてゐる事



挿圖第一三 燉 煌 畫 釋 迦 說 法 圖
(Serindia, PL. XCIV)

一〇

は明瞭であり、その目的が、單に左右相稱的圖様を作り出さんが爲めのみではなかつたとすると、爰にかたとしての用途が想像される譯である。

圖の右半なり左半なりを墨線で仕上げたものを、中尊の中央部分で二つ折りになし、他の用紙數枚を同時に折り込んで、さて墨線に沿ひ穿孔して行けば(勿論、中尊のみは一度抜いて更めて全形を穿孔せねばならぬ)、左右相稱の圖を作り出すと同時に、一舉にして數枚の點描畫が得られる理窟である。そして挿圖第一三の如きは、その場合の原圖であらうと考へる事も可能である。墨線部の裏は表か、裏は表か(點描部)。斯く解釋すれば、かゝる穿孔圖は、圖様を同じうするもの數圖を同時に作つた事實を物語る名残りの紙片と云ふに停まるであらう。

然し穿孔そのものが、強靱な紙質と相俟つて、圖様轉寫への主要な役

目をなすものと見るならば、この種の紙片が、單に數葉の圖を作製した名残りであると云ふ程度に止どまらず、壁畫製作の際の壁面への轉寫といふ、洵に重大な使命を持つ所の紙型となる譯である。

けれども問題は、これ等の穿孔が、果してその様な役目を果すに堪へるものであるかどうか、と云ふ點に掛る。それは打ち抜き孔ではなく、針先で突き差した程度のもので、その直径もたかゞ知れてゐる。であるから、この孔を通して、表面から裏面へ仙人過關的の轉寫行爲をなすと云ふが如き事は考へられず、勿論ステンシル或はテンプレート使用の際の様な刷子や型附粉の應用も利かず、又その様なものを用ひた形跡も現物には認められぬ。そこで、穿孔が實用に堪へる程度の大きさを持たない限り、これ等の遺品を以て佛畫大量生産用の型紙の一種に擬する事は困難になる。とは言へ、往時の工人等が如何やうに是れ等の紙片を使ひこなしたのか、案外な用法が無いでもないとすれば、迂闊な判斷を下す事は差し控へるべきであらう。更に後日の研究、特に技術家方面の研究に俟つとして、爰にはこの様な特殊な遺品のある事を記すに止どめよう。ついでに、穿孔を以てする佛像の形態が全く同じで、唯だ手相のみを異にする四枚の佛畫小片が、スタイン蒐集中に認められる事を附記して置く。^{註一九}

既に記した様に、燉煌千佛洞第一一七窟の天井壁畫に於ては、何等かの精巧な、かたを用ひて成つたと思はれる佛畫が、組を成して遺

「かた」による造像

存して居るのであるが、その様なかたを他の洞窟にも使用するとすれば、同じ内部裝飾を持つ洞窟の幾つかゞ作られる事もあり得るのである。又實際に於て、洞窟は異なるが窟内壁畫裝飾の構想を同じうし、更に壁畫そのものも同じかた、或は粉本による製作である事を示して居る場合がある。例へばP第八一窟とP第八四窟の場合の如きがそれであり、正面佛龕の天井を天蓋の形に作り成し、周壁を障子の形態に劃して其の奥壁に報恩經變相を描く、と云ふ構想が共通であるばかりでなく、天蓋形式の支輪間の諸尊の如きは、中央に位置する雙身佛を首めとし、各尊とも悉く兩窟のものが符節を合する状態であり、その間、かたの使用と云ふ事を想像せしめる餘地が、充分にある様に思はれる。^{註二〇}

斯くの如く、或る特殊技法を以て機械的に、或は半ば機械的に作畫すると云ふ實例は、燉煌壁畫に於て屢々見る所であり、同時に又、燉煌絹本畫（特に幡畫）に於ても幾多の實例を求める事が出来る。爰に其の一例として、スタイン蒐集の中から幡畫菩薩圖を二流舉げて置く（圖版第二）。兩像共に形姿及び法量を同じうしつゝも、賦彩に差違が與へられてゐる所に注目を要する。

此のやうに、かたを同じうし、賦彩を異にする圖の存する事は、前述の通り西域地方の塑造彫刻に於て、型模を同じうしつゝも著彩に變化の與へられたものが存する事實と同じ行き方である事が判るが、更に彫塑（挿圖第四）の場合の如く、型模を同じうし、然かも

その末梢部或は附帶物の適當な變化によつて、出來上りにヴァリエエティーを齎してゐるやうな佛畫の作例が無いものであらうか。或は又、挿圖第八の塑造兩菩薩像の如く、同一の型模で打ち出した

顔、胴、下肢などの接ぎ方の違ひによつて、出來上りに巧みな變化を獲てゐる様な例が、繪畫の場合にも無いものであらうか。



挿圖第一四 燉煌千佛洞第168窟左側下段壁畫
(Mission Pe-liot, PL. CCCXXIX)

これは幸に唐宋間の燉煌壁畫中に適當な實例を求める事が可能である。然かも實例は二、三に止どまらぬが、爰にP第八窟とP第一六八窟の壁畫を擧げて概要を示さう。

挿圖第一四は第一六八窟左壁の下段で、上段には法華經變相があ

る。挿圖第一五・第一六は第八窟右壁から右前壁に連なる下段の部分で、上段には華嚴經變相や維摩經變相などが遺つてゐる。そして、この下段に並ぶ菩薩形の像は、夫れ夫れ違つた手付きで各自思ひ思ひの花などを把持し、窟内正面の本尊に敬意を向ける姿に作られてゐるが、その相貌を首めとし、姿態服飾の點にも互に甚だしい相似を示してゐるのに氣が付く。

先づ挿圖第一四の五像(a-e)を見る。五像の相貌の酷似が強くわれわれの注目を惹き、次いで胴體から下肢への形の相似が目立つて来る。そして、其處に二種類に分け得る形態のものが、規則正しく交互に配置せられてゐるものである事が明瞭になつて来る。即ち圖中のa・c・e三像を假りに甲種形態とすれば、その中間に介在するb・d二像は乙種形態であり、乙種が上半裸身で兩足を八ノ字に踏み開き、身邊をめぐる綬帶が曲線を描いて大きく翻轉してゐるのに對し、甲種は雙肩を裹み兩足を踏み開かず、綬帶も亦靜かに軀に沿うて垂下して居る。なほ作者は此の兩種の像に夫れ夫れ異なる頭光を與へ、異なる裝身法を取らせてゐるが、要するに此の甲乙兩種は、燉煌畫菩薩像全般を通じて見られる印度式シナ式兩種の形態と呼應するものであり、甲種はシナ式、乙種は印度式(可なりシナ化され、源流の佛はなほ隨所に認め得る)の流れを汲んでゐる事が判る。

交互に配置せられた甲乙兩種の像は、各々の種別内に於て、何れも駭くべき相似性を發揮して居り、胴部も脚部も、頭部同様、同じかたで作られたものである事を疑ひ得ない。問題は手(上肢)にあ

る。上肢も、各像の異なる所は下膊部であり、上膊^{（かた）}の部分までは相違が認められぬ。そこで考へられる事は、これ等の壁画用のかたなるものは、下膊部のみはかたから除かれて居り、大體の轉寫を終へた

後、下膊

が適當に

形態の變

化を求め

つ、附加

されて行

つたので

はない

か、とい

ふ點であ

る。なほ

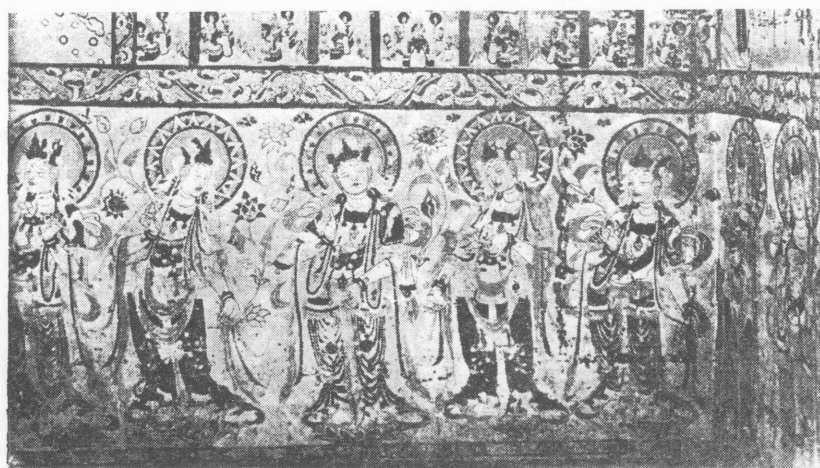
此の事

は、これ

等の畫像

の下膊部

の描寫

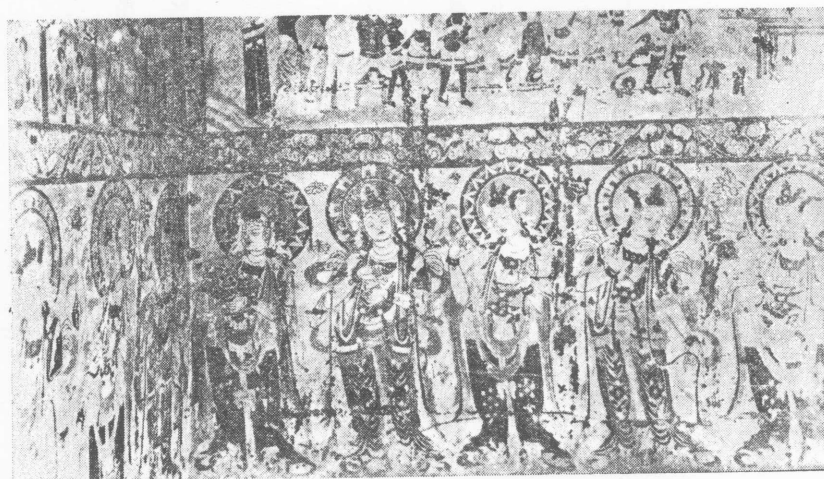


a b c d e
挿圖第一五 敦煌千佛洞第8窟右側下段壁畫
(Mission Pelliot, PL. XXI)

が、他の部分のそれに比べて何となく不自然でぎこちなさが目立つ事、及び下膊部の形態が夫れ夫れ違ひながらも、なほ且つ一定の型を逐つてゐる事實^{（髪で、手の部分は手の部分別個のカタが準備さ）}（れてゐたのではないか、との想像も成り立つ。）などからも

「かた」による造像

考へられて来る。下膊が一定の型を逐つてゐる事は、挿圖第一四の a 像の右手と c 像の右手との相似、且つそれ等と挿圖第一五 e 像・挿圖第一六 e 像の右手との相似が物語つてゐるが、更に挿圖第一四



a b c d e
挿圖第一六 同上前方下段壁畫
(Mission Pelliot, PL. XX)

挿圖第一六 d 各像の左手の相似などが、齊しく吾人に注目を促してゐる。そして、カタによる轉寫の際の幾分の頽れ、或は工人故意の變形などを許容するとせば、この場合の手だけのかたといふ事も考

a・挿圖
第一五
c・挿圖
第一六 e
各像の左
手の相
似、挿圖
第一五
b・c・
挿圖第一
六 d 各像
の右手の
相似、さ
ては、挿
圖第一五
b・e・

へられぬでもない。挿圖第一四b像やd像の華を持つ兩手のぎこちなさや、挿圖第一六b像が示す兩手の構への無意義などは、蓋し手の型の轉用の無理から來た結果と見做すべきであらう。

次に第八窟の十體の像（挿圖第一五、第一六）に目を轉ずると、爰で更に新しい事實を見出だす。即ち各像の首が自由にすぐ換への利くものであつた事である。

この洞窟の諸像も、前記第一六八窟の諸像と同様、甲乙兩種の胴體（但し形姿は彼の裏返し）を持つものが交互に並んでゐるが、^{註二}その頭部を見ると、顔の向きに正面と斜面の兩種があり、又、斜め向きにも左と右の兩様があり、且つその角度にも差異がある。挿圖第一五c像と第一六b像とは同種の胴體を持ち且つ正面向きの同型の顔面を有す手（手が異なるのみで、全形略ぼ同じと言つてよい）。第一五d像と第一六c像もそれと同様に同種の胴體と同型の斜め向き顔面とより成り、手の相を異にするのみ。そして其の伏した顔面の角度が水平に用ひられると、第一五a・e・第一六a・e各像の顔面となり、裏返しに用ひられると第一五b・第一六d兩像の顔になる（總て相貌の酷似に注意）。第一五b像と第一六d像とは、その胴體の種別を異にしながら、同型の首と同型の手とが與へられてゐる爲め、全姿互に甚だしい相似を感じしめてゐるのは注目に値する。これと反對に、第一五b像と第一六c像とは同種同型の胴體を基とする像でありながら、たゞ首の向きが逆になつてゐる許りで、全身の向背までが逆になつてゐるかの様な感を抱かせてゐる。此の邊りに、かた使用上の妙が存するのであらう。

以上、燉煌壁畫は、假令僅少な種類の胴體・首・手などのかたであつても、その巧みな組合せによつては、駭くべき變化に富む佛像シリーズを作り出し得るものである事をわれわれに示してゐる。そして其の事が西域地方型模彫塑の場合と同じであり、大量生産といふ一方の目的を暫く問題の外に置くとしても、かた使用による造像の世界には、又それ獨得の特色があるといふ事を教へて呉れるのである。

註一 Stein: Innermost Asia, P. XLIX, Ch. 016.

註二 美術研究、一三五、矢代幸雄氏「燉煌出土塑造半肉佛像」

註三 千佛洞第一一一a窟や第一一一窟（ベリオ氏編號）などの小型貼附像には、型モノと思はれる菩薩像で、然かも高肉彫りの像が多數に認められるが、それ等も決して精巧な作とは言ひ難い。

註四 ショールチュク北方、Ming-oi 第十一號址。

註五 Le Coq: Späntike, I, S. 12.

Le Coq: Bilderatlas, fig. 180.

註六 Ming-oi 第四號址

註七 實例、ショールチュク塑造頭部、Le Coq: Späntike, I, Tafel 21, b.

註八 Ming-oi 第十二號址

註九 Le Coq: Bildatlas, S. 27.

註一〇 Stein: Serindia, I, p. 166, Desert Cathay, I, p. 243.

註一一 " " II, pp. 892, 928, III, pp. 1111, 1113.

註一二 " " I, fig. 41, p. 166, Pl. XI, Kha. i. C. 0097.

" : Desert Cathay, I, fig. 77, p. 243.

註一三 " : Ancient Khotan, Pl. III, IV, pp. 248, 274.

註一四 和闐地方に見る千佛の姿は、普通「定印」の坐像であり、その定印を結ぶ兩手の拇指が立ち上つてゐる爲め、扁平な五角形の輪郭を作るのが常である。

Serindia, III, Fig. 314, Pl. XI, Kha. i. C. 0097. 等参照。

註一五 楊汀「丹青誌」。拾紙、和名子ンガミ又ヒサゴガミ、漢名灰紙ト云、檜又瓢ヲ燒細末シテ紙ニスリ付テ本紙ト繪本間ノニ右ノ紙ヲ納メ壓尺ヲ居エ以篋筆意捻也、上圖本紙エ寫也。捻云ハヒ子ルノ意歟。漢人此術ヲ仙人過關云。

同書。篋筆、捻篋也。

註一六 Mission Pelliot: Touen-houang, IV, Pl. CXC VIII—Pl. CCXXXI.

註一七 Serindia, Pl. XCIV, Vol. II, p. 892

註一八 Arthur Waley: Catalogue, LXXII.

註一九 スタイン蒐集 Ch. xli, 001—004.

註二〇 Mission Pelliot, Pl. CLXVIII, Pl. CLXXVI

註二一 隅の二像（挿圖第一五e・第一六a）は胴體の寸が詰まつて、畸形的な不愉快さを呈してゐるが、使用のカタは他の諸像のものと異つてゐると思はれず、何等かの理由で寸が詰められたものと見える。